

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年(百二十三)

第五章・二つのこよみ(西暦とヒジュラ暦)(九)

百二十三 ヒジュラ暦千四百年(西暦千九百八十年)前後(五―五)



このようにヒジュラ暦という尺度で歴史的事件を並べてみると、ヒジュラ暦千四百年前後は中東イスラーム世界の大きな地殻変動、パラダイムシフトの時代であったと言える。その原動力はイスラームという宗教である。ヒジュラ十五世紀の最初の十年の間(西暦千九百八十九年)にムスリムたちはイスラームの教えに反する敵対勢力、背教者たちとの闘いを開始した。最初の敵が無神論の共産主義者アフガニスタン中央政府との闘いであった。その後現在に至るヒジュラ十五世紀前半は、ムスリムの戦いはスンニ派對シーア派というイスラーム二大勢力の対立からイスラーム穏健勢力と原理主義が対立する構図となり、さらにイスラム国(IS)と呼ばれるカリフ制の仮想国家が既存の世俗国家に戦いを挑んだことは周知のとおりである。

日本の一向一揆のように宗教の鎧をまとった運動は始まったが最後どんどん過激化して行くものである。現代のイスラーム運動もその様相を色濃く帯びている。この運動は過激の極に達し、大衆の支持を失ったときに自滅して終焉する。仏教思想では「盛者必滅」ということになる。ただ争いがいつ終焉するかはわからない。まさに「神(アッラー)のみぞ知る」である。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: Arehakahazuyai@gmail.com